

データから分析する大阪のラグビー（高校ラグビーを中心として）

萩原 理史

【目的】

・2019年は日本でラグビーW杯が開催され、ラグビーが大いに盛り上がった。その後も、日本人のラグビーに対する関心は依然持続されているようである。さて、ここ大阪でラグビーといえば、まず何が思い浮かぶであろうか。恐らく多くの大阪人にとって、ラグビーといえば、東大阪市の花園ラグビー場で開催される全国大会で毎年のように地元大阪勢が優勝争いをしている「高校ラグビー」ではないだろうか。さて、小学生の頃からのラグビーファンである私にとって、高校野球といえば「甲子園」、高校ラグビーといえば「花園」であり、大阪勢はずっと強豪として活躍してきた印象があるが、その印象は事実なのであるだろうか。この点について、漠然とした感覚ではなく、データでもって分析してみたい。次に、大阪勢が強豪となった要因は何であろうか。大阪は3校が全国大会に出場できる。また、大阪はラグビー部がある中学校が多く、高校からラグビーを始める選手が多い他地域に比べ、アドバンテージがあるのが要因だと言われている。確かに、それも事実であろう。しかし、大阪の高校生のラグビーにかけるひたむきな努力や創意工夫をそのような安直な分析で済ましてよいのだろうか。ラグビーを他のスポーツと比較した際の特徴、「頻繁なルール改正によるプレイスタイルへの影響」という点に着目して考察してみたい。

【内容】

・1918年に始まった全国高校ラグビー大会の会場は、鉄道会社との関係もあり何度も変更されてきた。1929年に花園ラグビー場が開設されたが、その花園ラグビー場を会場として同時期に開催されていた全国高専大会が1948年に終了した後も、結局1963年まで会場とはならなかった。分析の結果、高校サッカー大会と共同開催していたことが主たる原因であろうと結論付けることができた。ついで、大阪勢が強豪として定着するようになるのは、データ分析の結果、1990年代以降であり、それまではむしろ東高西低の時代であったことがわかった。また、大阪勢が近年優勝候補の常連として定着した要因については、ラグビー特有の頻繁なルール改正によりプレイスタイルの変更を余儀なくされるという状況を、中学ラグビーが盛んで選手層が厚いという優位性に加え、大阪人の特性でもある、コミュニケーション能力や転換期に対応する適応力等で克服することができたと結論付けた。

【結果（今後の考察を含む）】

・高校ラグビーの聖地である花園ラグビー場が全国大会の会場になるまでには、紆余曲折があった。また、現在のような、西高東低の勢力図が定着したのも、意外と最近のことであることもわかった。我々が漠然と感覚で思っていることも、データで分析すると思い込みすぎないことがわかる。そして、大阪の高校が毎年優勝争いをする程の強豪として定着したことも、分析することによって、相応の要因があることがわかった。W杯の日本再開催が計画されているが、愛着や感覚でなく、冷静で合理的な分析に基づいて大阪にとって最適な対応をしていただくことを期待したい。

令和元年度 大阪府立大学大阪検定客員研究員 研究成果報告



テーマ名: データから分析する大阪のラグビー
発表者氏名: 萩原 理史

主催: 大阪府立大学研究推進機構
協力: 大阪商工会議所

データから分析する大阪のラグビー (高校ラグビーを中心として)



写真提供：近鉄グループホールディングス(株)

大阪府立大学
研究推進機構
大阪検定
客員研究員

萩原 理史

① - 1 全国高校ラグビー大会の会場の変遷

回	期 間	会 場	開設者(現社名)
第1～5回	1918～1922年	豊中運動場	阪急電鉄
第6～7回	1923～1924年	宝塚運動場	阪急電鉄
第8～10回	1925～1928年	甲子園球場	阪神電鉄
第11～25回	1929～1943年	甲子園南運動場	阪神電鉄
(第24回)	1942年	福岡春日原球場	西日本鉄道
第26～27回	1947～1948年	西宮球技場	阪急電鉄
第28回	1949年	東京ラグビー場	日本ラグビー協会
第29～41回	1950～1962年	西宮球技場	阪急電鉄
第42回以降	1963年～	花園ラグビー場	近畿日本鉄道

第1回は日本フットボール優勝大会として、ラグビーとサッカーの2部門で開催される。(第41回まで共同開催)

1929年 花園ラグビー場が開設

1930年 全国高専ラグビー大会が花園ラグビー場で開催

第42回大会から花園ラグビー場で開催

これまで、花園ラグビー場が会場にならなかったのはなぜ？

※第24回大会は戦時中のため、関西大会と九州大会の分割開催。

※第28回大会のみ東京（関西以外）で開催。

① - 2 花園ラグビー場の開設

1928年	2月12日	秩父宮殿下観戦のもと、甲子園球場で第1回東西対抗が実施される。野球場でラグビーをしたことに恐縮し、阪神電鉄が甲子園南運動場を新設。
	12月5日	秩父宮殿下が、橿原神宮参拝の際に、大軌鉄道の車内で同社種田(おいだ)専務に「ラグビー専用のグラウンドを作っては」とのお言葉あり。(東大阪市HPでは10月とある。)
	12月10日	大軌鉄道の役員会で満場一致で競馬場跡地にグラウンド建設を決定。
1929年	3月	英国・トゥイッケナムラグビー場をモデルに、ラグビー場建設に着工。
	11月	東洋初のラグビー専用グラウンドとして花園ラグビー場が誕生。
	11月22日	花園ラグビー場グラウンド開き。全日本OB選抜対全日本学生選抜の試合が、秩父宮殿下・妃殿下臨席のもとで実施される。
1930年	1月	花園ラグビー場が第5回全国高専ラグビー大会の会場となる。

ラグビー史における歴史的事実の混同

1. 秩父宮殿下のラグビー場開設のお言葉が、2月12日の際の発言と混同されている。
2. 南甲子園運動場と甲子園南運動場の呼称の不統一（ラグビー関係者は南甲子園運動場を使用）。
3. 花園ラグビー場の開設日が、12月21日や12月22日と混同されている。

① - 3 花園ラグビー場が会場にならなかった理由は？

花園ラグビー場の「当時の正式名称は『日本蹴球協会並びに西部ラグビー蹴球協会専属花園ラグビー場』であった。…戦前は協会指定の大きな試合だけが行われた。全国高校ラグビーの舞台になったのは戦後で、西宮球技場の閉鎖に伴っての変更であった。」

出典：『なにわのスポーツ物語』（2015年6月 なにわのスポーツ研究会編）

国際試合などの大きな試合以外でも使用

全国高専ラグビー大会（1月開催）の会場として使用（1930年第5回大会～1948年第20回大会）

1929年11月花園ラグビー場開設により1930年1月から使用

1949年第21回は東京ラグビー場で開催（日本ラグビー協会主催・東西隔年開催予定）

1950年学生改革により、全国地区対抗大会（瑞穂ラグビー場）へと発展的解消

近畿中学選抜大会（4月開催）の会場となる。（1936～41年 1947年は橿原で開催・7回で終了）

全国中学大会の大阪・奈良・和歌山地区予選で使用（遅くとも1933年第16回大会予選で使用確認）

（実は、本大会より早く予選大会で花園ラグビー場が使用されていた。）

⇒同月に実施していた全国高専大会の終了により、高校大会の会場にならなかったのはなぜ？

① - 4 元祖「花園」全国高専ラグビー大会とは

●前期全国高等専門学校ラグビーフットボール大会(日本ラグビーフットボール大会高等専門学校部)

回	期間	会場	主催など	備考
第3回	1920年	豊中運動場	大阪毎日新聞主催	日本フットボール大会において大学・高専・中学混在から中学が分離。参加チームなし。
第4～5回	1921～22年			第5回大会に大阪高商が出場。
第6～7回	1923～24年			宝塚運動場
第8回	1925年			甲子園球場

●全国高等専門学校ラグビーフットボール大会

回	期間	会場	主催など	備考
第1～4回	1926～29年	京大グランド	京大ラグビー部主催・西部ラグビー協会指導・大阪毎日新聞社後援	参加チーム増により、西部ラグビー蹴球協会(日本協会)の設立を機に、大学チームの参加を認めなくなった(高等学校・大学予科・高等専門学校が参加)。(第2回は大正天皇崩御により中止)
第5～17回	1930～42年	花園ラグビー場	西部ラグビー協会主催・京大ラグビー部主管・大阪毎日新聞社後援	(第4回大会のみ日本ラグビー協会主催。)
(第17回)	1942年	(春日原運動場)		関西大会と九州大会に分離開催。
第18回	1943年	花園ラグビー場	大日本学徒体育振興会主催・文部省後援	
第19～20回	1947～48年	花園ラグビー場	日本ラグビー協会主催・西部ラグビー協会主管・毎日新聞社後援	
第21回	1949年	東京ラグビー場	日本ラグビー協会主催	毎日新聞社が後援から外れる。学制改革により終了。

※『関西ラグビーフットボール協会史』(1983年)参照

後継大会として、全国地区対抗大学大会、全国高等専門学校大会(工業高専中心)があるが、学校の性格が異なるため、最近刊行のラグビー史の著書からは、省略されることが多く、記憶からだけでなく、記録からも忘れ去られる恐れがある。

※高専大会はラグビーとサッカーは別会場で開催。

① - 5 全国高校サッカー大会との共催の影響

回	年	事項
(※サッカー)	1917年	春、杉本商店(大阪市西区)の店主杉本貞一(元慶大ラグビー部主将)が大阪毎日新聞社事業部運動課長の西尾守一(早大野球部出身)にラグビー大会の開催を依頼。
第1回	1918年	大阪毎日新聞社主催で冬季の運動競技として、「日本フットボール優勝大会(ラグビーとサッカーの2部門)」が豊中運動場で開催される。(ラ式4校・ア式8校 サッカー関係者に相談なし)
第8回	1925年	ラグビー大会は甲子園球場の外野を使用。サッカー大会は鳴尾運動場・甲陽中グラウンドで実施。
第9回	1926年	全国中等学校蹴球大会と改称。サッカーの大会が全国大会化(1~8回は関西の学校のみ参加。各地に大会あり。大日本蹴球協会の野津謙等が関与したため、毎日新聞社主催大会が支持を拡大していく。)
第16回	1934年	サッカーの大会が毎日新聞社主催のものに一本化される。
第25回	1947年	甲子園南運動場が進駐軍に収用(飛行場)されたため、会場が西宮球技場に移る。
第41回	1963年	西宮球技場が、名神高速道路建設の影響で縮小されたため、ラグビー大会の会場は花園ラグビー場へ、サッカー大会の会場は蹴蹴球場・金岡公園陸上競技場等へ移る。
第44回	1966年	サッカー大会の毎日新聞主催が終了(日本蹴球協会と高体連が冬の高校選手権を夏の高校総体(インターハイ)に組み入れようとしたため)。参加校は16校に縮小。
第50回	1971年	サッカー大会の主会場が長居競技場へ。(読売新聞社・日本テレビの主催)。
第55回	1976年	サッカー大会の会場が首都圏へ移る。

全国高校サッカー大会との共同開催により、西宮球技場で開催され続けたと推測される。

サッカーとラグビーが同じ競技場であることによる運営コストの節約(大会運営役員・毎日新聞社等の負担軽減)

選手宿舎の確保の利便性(西宮市…春・夏の高校野球 冬のラグビー・サッカー)

ラグビー優先の日程とグラウンドの割当(第1~3グラウンド、野球場)

※全国高校サッカー大会史は、非常に興味深い。文部省・高体連・日本蹴球協会の思惑が絡む。

① - 6 ラグビー中心の試合日程

1960年	第40回ラグビー大会(32校)			第39回サッカー大会(26校)		
	回戦	試合数	開始時間	回戦	試合数	開始時間
1月1日	1回戦	16試合	9:00			
1月2日				1回戦・2回戦	10試合・2試合	10:00
1月3日	2回戦	8試合	10:00	2回戦	6試合	13:00
1月4日				準々決勝	4試合	10:30
1月5日	準々決勝	4試合	11:00			
1月6日				準決勝	2試合	13:30
1月7日	準決勝	2試合	14:00			
1月8日				決勝	1試合	13:30
1月9日	決勝	1試合	14:00			

- ・ 1月3日は、サッカーは第2・第3グラウンド及び野球場（外野）で実施。
- ・ サッカーは第40回記念大会から参加32校になる。
- ・ **ラグビーが優先で試合日程・グラウンドの割当が組まれていたことがわかる。**

① - 7 全国高校ラグビー大会の東京開催

1949年の第28回は東京ラグビー場（現秩父宮ラグビー場）で開催

学制改革により「第1回全国高校大会」となる。→ 後に第28回大会に戻す。

日本ラグビー協会の単独主催 → 第29回より毎日新聞社が後援に復帰

（毎日新聞社が**諸般の事情**で主催から手を引く『80回記念誌』より）

東京ラグビー場（1947年11月に完成） → 第29回は西宮球技場に戻る。

東西で隔年開催の予定 → 東京開催を断念・関西開催で固定

運営面・営業面で失敗の理由

大晦日から降り続いた氷雨が客足を止めた。東京は高校ラグビーの関心が薄かった。

関東ラグビー協会による大会の運営体制の足並みがそろわなかった。

毎日新聞社と袂を分かったため、事前のPRがほとんどなかった。

「高校大会はやはり、伝統ある関西で開催すべき」と、東京開催をあきらめた。

（『激闘高校ラグビー』1991年 村上清司（毎日新聞記者）） ⇒ **本当の理由は？**

① - 8 全国高校大会の東京開催が断念された理由は？

1949年の第28回は東京ラグビー場（現秩父宮ラグビー場）で開催 → 東西で隔年開催の予定

学制改革により「第1回全国高校大会」として開催。日本ラグビー協会が単独で主催。

運営面・営業面で失敗に終わり、翌年から西宮球技場に戻って開催。東京開催を断念。（サッカー大会は1976年より関東へ）

●高校ラグビー3大会の会場およびグラウンドの面数

大会名	会場	府県名	グラウンド数	出場校数	期間	試合数
全国高校大会	花園ラグビー場	大阪府	メイン1面 サブ2面 陸上1面	51	12月27日～1月7日	50
全国高校選抜大会	熊谷ラグビー場	埼玉県	メイン1面 サブ2面 陸上1面	32	3月29日～4月7日	55
全国7人制大会(アシックスカップ)	菅平高原サニアパーク	長野県	メイン1面 サブ4面 陸上1面	48	7月21日～7月23日	132

東京ラグビー場（秩父宮ラグビー場）はメイングラウンドの1面のみであり、冬休みの短期間に多くの試合を実施するのは困難。（出場校数増による試合数増に対応できない。 ※全国高校野球大会では過密日程が問題になっている。）

全国高校7人制大会（アシックスカップ）の第3回・第4回大会や全国高校サッカー大会のように会場を分散させて実施する場合、大会運営の複雑化、選手の移動など問題点が多い。

西宮球技場・花園ラグビー場はグラウンドが3面使用できたことが、出場校数増による試合数増に対応できた。（『関西ラグビーフットボール協会史』） → **東西隔年開催から東京開催へと繋がる東京一極集中化を阻止できた。**

① - 9 東西隔年開催という危機（東京一極集中化）

大学東西王座決定戦（1928～1964年 35回 開催会場は隔年ではないが、東西で開催）

東…神宮競技場・東京（秩父宮）ラグビー場

西…京大グラウンド・花園ラグビー場

→大学選手権大会（1965～）へと発展的解消

準決勝以上は、東京（秩父宮ラグビー場・国立競技場）で開催

全国社会人大会（1949～2003 55回 開催会場は3～7回を除き、東西隔年開催）

東…東京（秩父宮）ラグビー場・国立競技場

西…花園ラグビー場

→2003年トップリーグ開催で発展的解消

マイクロソフトカップ開催以降のトーナメント戦の決勝は東京で開催

日本選手権（1964～）も第11回大会を最後に決勝の大阪（花園）開催はない

東西隔年開催は、最終的には観客動員などの関係で東京開催に一元化されている。

① - 10 大阪のラグビーと新聞社・鉄道会社の関係

●昭和4（1929）年の西部協会大阪支部加盟チーム（学校除く）

大同電力、**大鉄局**、日本電力、**大軌電車**、**阪神電車**、**京阪電車**、**阪急電車**、**大阪毎日新聞社**
（**関西実業団チーム第1号**）、**大阪朝日新聞社**、**大丸**、**大阪市役所**、**関大OB**、**大阪商大OB**、**関西ラグビークラブ**、**オールノムラ・ラグビークラブ**

- ・ 阪急電鉄…豊中運動場（1～5回）、宝塚運動場（6～7回）、西宮球技場（26～41回）
- ・ 阪神電鉄…甲子園球場（8～10回）、甲子園南運動場（11～25回）
- ・ 近 鉄…花園ラグビー場（42～94 2015年に東大阪市に所有権を譲渡）
- ・ 京阪電鉄…寝屋川グラウンド（1937年大阪実業団リーグ）

（**車内吊りポスター・駅のポスター・選手に優待乗車券・特別電車**『関西ラグビーフットボール協会史』P39 小泉五郎）

- ・ 毎日新聞…全国高校大会（1918～48 1950～ ）全国高専大会（1920～1948）
- ・ 朝日新聞…全国社会人大会（1949～2003）

（各新聞社にラグビー部OBの記者『関西ラグビーフットボール協会史』P39 小泉五郎）

※参考（東京）

- ・ 明治神宮外苑競技場（1924～1957・明治神宮） → 国立競技場（1958～）
- ・ 秩父宮（東京）ラグビー場（1947～ 日本ラグビー協会→1962年国立競技場に移管）
- ・ 読売新聞…全国大学選手権後援

→ **鉄道会社・新聞社との関係が強い関西とアマチュアリズム重視の東京**

① - 11 野球と新聞社・鉄道会社との関係

全国高校野球選手権（1915～ 阪急豊中運動場 阪神鳴尾・甲子園球場 朝日新聞社）

選抜高校野球大会（1924～ 山本球場 阪神甲子園球場 毎日新聞社）

全国高等専門学校野球大会（1924～1934）

京大の主唱で開催 四帝大（東京・京都・東北・九州）野球連盟が主催、朝日新聞社が後援 東京と京都の隔年開催 1928～京大が阪神電鉄の援助を受け、甲子園球場に定まる。東大が有料試合を批判、高専分離を提唱。1934年に東大の主張を容れ2部制になる。）

1935年に分離（～1948）

全国高等学校野球大会…全国高等学校野球連盟主催

全国実業専門学校野球大会…全国実業専門学校野球連盟主催・朝日新聞社後援

東京六大学野球（1925～ 東京六大学野球連盟 明治神宮球場（明治神宮所有））

東京は大学スポーツが中心でエリート意識・アマチュアリズムが強い。

② - 1 東高西低（東北・東京）から西高東低（関西・九州）へ

		1916～ 1930年度	1931～ 1940年度	1941～ 1950年度	1951～ 1960年度	1961～ 1970年度	1971～ 1980年度	1981～ 1990年度	1991～ 2000年度	2001～ 2010年度	2011～ 2019年度	計
北海道・東北	優勝	0	2	4	6	4	0	2	0	0	0	18
	準優勝	0	2	1	5	1	2	1	1	0	0	13
(秋田県)	優勝	0	2	3	6	2	0	2	0	0	0	15
	準優勝	0	2	1	0	0	1	1	1	0	0	6
関東	優勝	1	0	0	3	3	6	5	3	1	1	23
	準優勝	1	0	0	5	5	3	5	3	2	3	27
(東京都)	優勝	1	0	0	2	3	6	3	1	0	0	16
	準優勝	1	0	0	5	5	3	2	1	0	0	17
中部・愛知県	優勝	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	準優勝	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
近畿	優勝	11	1	3	0	2	3	4	6	7	5	42
	準優勝	11	3	3	0	3	4	2	4	3	6	39
(大阪府)	優勝	0	0	3	0	0	1	2	4	6	5	21
	準優勝	2	0	2	0	0	1	1	3	0	3	12
(京都府)	優勝	11	0	0	0	0	1	0	2	1	0	15
	準優勝	8	1	0	0	0	3	0	1	1	0	14
九州	優勝	0	0	2	1	1	1	0	0	3	3	11
	準優勝	0	1	2	0	1	1	1	2	4	0	12
(福岡県)	優勝	0	0	2	1	1	0	0	0	3	3	10
	準優勝	0	1	2	0	0	0	0	0	3	0	6
外地(満州・朝鮮・台湾)	優勝	1	8	0	0	0	0	0	0	0	0	9
	準優勝	1	3	1	0	0	0	0	0	0	0	5

戦前は京都勢、外地勢が強かったが、戦後になると北海道・東北勢（秋田工）、次いで関東勢（保善・目黒・国学院久我山）が強く、東高西低時代が続く。

現在の関西勢・九州勢が強い西高東低時代が始まるのは、平成以降になってからである。

② - 2 高校日本代表における大阪の高校出身者

年度	1966～70 年度	1970～75 年度	1976～ 1980年度	1981～ 1985年度	1986～ 1990年度	1991～ 1995年度	1996～ 2000年度	2001～ 2005年度	2006～ 2010年度	2011～ 2015年度	2016～ 2018年度	計
遠征回数	1	1	4	5	5	5	5	5	5	5	3	44
大阪府	0	4	16	16	32	29	29	40	26	22	18	232
(割合)	0.0%	16.0%	15.7%	13.2%	25.6%	23.2%	22.7%	30.8%	20.0%	16.8%	23.1%	20.8%
秋田県	2	3	5	12	6	5	5	0	4	3	2	47
東京都	5	6	22	14	10	20	10	4	10	13	3	117
神奈川県	0	0	4	7	3	6	5	2	7	9	11	54
京都府	0	0	13	14	9	4	10	13	8	10	4	85
奈良県	3	0	3	5	10	5	5	9	2	8	1	51
兵庫県	0	0	0	0	0	1	5	0	3	2	3	14
福岡県	0	0	0	2	3	4	9	8	20	25	15	86
全国計	23	25	102	121	125	125	128	130	130	131	78	1118
優勝回数(参考)												
大阪府	0	0	1	1	1	2	2	4	2	3	2	18
秋田県	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	3
東京都	1	3	3	2	1	0	1	0	0	0	0	11
京都府	0	0	1	0	0	1	1	1	0	0	0	4
福岡県	1	0	0	0	0	0	0	0	3	2	1	7

大阪勢が強くなるにつれて、高校日本代表に選出される選手数は増加しているのがわかる。

ただ、最近は高校でも外国人留学生が増加しており、留学生選手の代表選出により、大阪の高校出身者の代表選出数にも影響を及ぼしている。

② - 3 高校日本代表主将における大阪の高校出身者

年度	1966～70 年度	1970～75 年度	1976～ 1980年度	1981～ 1985年度	1986～ 1990年度	1991～ 1995年度	1996～ 2000年度	2001～ 2005年度	2006～ 2010年度	2011～ 2015年度	2016～ 2018年度	計
遠征回数	1	1	4	5	5	5	5	5	5	5	3	44
主将 (割合)	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 20.0%	0 0.0%	3 60.0%	4 80.0%	3 60.0%	3 60.0%	2 40.0%	1 33.3%	17 38.6%
副将	0	0	1	0	1	0	0	3	1	1	2	9
代表選手 (割合)	0 0.0%	4 16.0%	16 15.7%	16 13.2%	32 25.6%	29 23.2%	29 22.7%	40 30.8%	26 20.0%	22 16.8%	18 23.1%	232 20.8%

大阪の高校出身者が高校日本代表の主将に選出される割合は1990年代以降非常に高いことがわかる。

ワールドカップ開催以降、ルールの頻繁な改正により、ラグビー経験が長く、ラグビーの知識・理解度が高い大阪出身者が主将に選出される傾向が高くなっていることが推測される。

また、ワールドカップ開催以降は、寡黙で背中で引っ張るタイプのキャプテン（古きよきラグビー部主将像？）ではなく、**コミュニケーション能力やムードメーカー的な役割、外部への情報発信力**などがより重要になってきたことも大阪出身者が主将に選出されることに繋がっているのではないと思われる。

② - 4 大阪の高校日本代表選手の進学先

年度		1966～70年度	1970～75年度	1976～1980年度	1981～1985年度	1986～1990年度	1991～1995年度	1996～2000年度	2001～2005年度	2006～2010年度	2011～2015年度	2016～2020年度	計
回数		1	1	4	5	5	5	5	5	5	5	3	44
関東対抗戦計	全国	7	15	56	56	53	58	52	48	76	62	43	526
	大阪	0	2	8	6	9	11	10	13	10	11	9	89
	割合(全国)	30.4%	60.0%	56.6%	47.5%	43.4%	48.3%	40.6%	38.1%	61.3%	51.7%	61.4%	48.9%
	割合(大阪)	0.0%	50.0%	50.0%	37.5%	30.0%	37.9%	34.5%	34.2%	41.7%	55.0%	60.0%	40.3%
関東リーグ計	全国	6	5	10	13	26	33	44	48	25	38	11	259
	大阪	0	0	1	2	1	2	6	13	7	5	2	39
	割合(全国)	26.1%	20.0%	10.1%	11.0%	21.3%	27.5%	34.4%	38.1%	20.2%	31.7%	15.7%	24.1%
	割合(大阪)	0.0%	0.0%	6.3%	12.5%	3.3%	6.9%	20.7%	34.2%	29.2%	25.0%	13.3%	17.6%
関西リーグ計	全国	5	0	13	31	32	27	30	27	19	18	13	215
	大阪	0	0	5	8	17	16	13	12	7	4	4	86
	割合(全国)	21.7%	0.0%	13.1%	26.3%	26.2%	22.5%	23.4%	21.4%	15.3%	15.0%	18.6%	20.0%
	割合(大阪)	0.0%	0.0%	31.3%	50.0%	56.7%	55.2%	44.8%	31.6%	29.2%	20.0%	26.7%	38.9%
その他の地域の大学	全国	0	1	4	1	0	2	0	0	3	1	0	12
	大阪	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	割合(全国)	0.0%	4.0%	4.0%	0.8%	0.0%	1.7%	0.0%	0.0%	2.4%	0.8%	0.0%	1.1%
	割合(大阪)	0.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%
就職	全国	5	3	16	16	9	0	2	3	0	0	1	55
	大阪	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	4
	割合(全国)	21.7%	12.0%	16.2%	13.6%	7.4%	0.0%	1.6%	2.4%	0.0%	0.0%	1.4%	5.1%
	割合(大阪)	0.0%	0.0%	12.5%	0.0%	6.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.8%
不明(留学他)	全国	0	1	0	1	2	0	0	0	1	1	2	8
	大阪	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2
	割合(全国)	0.0%	4.0%	0.0%	0.8%	1.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.8%	0.8%	2.9%	0.7%
	割合(大阪)	0.0%	25.0%	0.0%	0.0%	3.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.9%
全国計		23	25	99	118	122	120	128	126	124	120	70	1075
大阪計		0	4	16	16	30	29	29	38	24	20	15	221

1980年代から1990年代は関西リーグの大学に進学する選手が多かったが、2000年以降は関東へ進学する選手が増加する傾向にある。関東対抗戦グループでは明治大に進学する選手が多いのが特徴であるが、2001年に清宮克幸氏（茨田高出身）が早稲田大学の監督に就任したことにより、早稲田大に進学する選手が増えた。また、東海大仰星高の選手が東海大に進学することも大阪の優秀な高校生が関東へ流出する原因になっている。トップリーグ・日本代表を目指す高校生にとっては、18～22歳の選手として成長しなければいけない時期を、関西リーグの大学で過ごすことに魅力を感じていないのではないかと思われる。

② - 5 大阪のラグビー伝統校（戦前からの予選参加校）

創部順	学校名(戦前)	学校名(戦後)	全国大会初出場	出場回数
1	天王寺中学校	天王寺高校	1925第8回	19
2	北野中学校	北野高校	1925第8回	6
3	八尾中学校	八尾高校	-	-
4	浪華商業	浪商高校	1970第49回	9
5	京阪商業	守口高校	1973第52回	1
6	四條畷中学校	四條畷高校	1948第27回	9
7	興国商業	興国商業・興国高校	1960第39回	9
8	浪高尋常科	-	-	-
9	日本大学附属大阪中学校	-	-	-
10	関西工学校	大阪工大高・常翔学園	1966第45回	38

戦前の全国大会に大阪から予選に参加していた学校は上記の10校

昭和23（1948）年、四條畷が天王寺・北野以外の学校で初めて全国大会に出場

大阪工大高が全国的な強豪校になる前は、興国・浪商・淀川工が大阪代表として活躍

大阪工大高は、昭和12年創部で、戦前は旧制中学は5年制であったが、関西工学校は乙種工業で4年制であったため、全国大会への出場が難しかった（常翔学園高校ラグビー部HP）としており、新興勢力ではなく伝統校であるといえる。

② - 6 大阪の全国大会出場校の地域性

学校名	所在地	地域名	全国大会 出場回数
天王寺・北野・淀川工・興国・大阪工大高(常翔学園)・ 茨田・阪南	大阪市	摂津	90
島本	三島郡島本町		4
浪商	茨木市		9
啓光学園・牧野・東海大大阪仰星	枚方市	北河内	39
四條畷	四條畷市		9
同志社香里	寝屋川市		4
守口	守口市		1
大阪桐蔭	大東市		14
布施・大商大附・近大附・布施工・大阪朝高	東大阪市	中河内	22
柏原	柏原市		1

全国大会出場校の所在地は、大阪市内、北河内及び花園ラグビー場のある東大阪市にほぼ固まっている。

(北摂・南河内・和泉には、ラグビー部の強い学校は少ない傾向がある。)

一方、サッカー部については、大阪で二番目に創部された岸和田高、三番目に創部された三国ヶ丘高が和泉にあり、北摂には池田高・摂津高・高槻南高等の強豪校が多く、同じフットボールである程度の棲み分けが考えられる。

② - 7 熱血教師（監督）の時代

監督名	高校名	都道府県	出身校	出身大	備考
中村誠	国学院久我山	東京都	国学院久我山	日体大	高校日本代表監督
梅木恒明	目黒	東京都	目黒	日体大	
神尾雅和	大東大一	東京都	保善	日体大	
松澤友久	相模台工	神奈川県	日川	日体大	
森喜雄	熊谷工	埼玉県	熊谷商	日体大	
山田耕二	西陵商	愛知県	工芸	日体大	
岩出雅之	八幡工	滋賀県	新宮	日体大	高校日本代表監督
山口良治	伏見工	京都府	若狭農林	日体大	高校日本代表監督
小城博	佐賀工	佐賀県	竜谷	日体大	
荒川博司	大阪工大	大阪府	寝屋川	天理大	高校日本代表監督
川村幸治	布施工	大阪府	啓光学園	天理大	高校日本代表監督
記虎敏和	啓光学園	大阪府	啓光学園	天理大	
田中克己	天理	奈良県	天理	天理大	高校日本代表監督

日本体育大学ラグビー部綿井永寿監督が育てた日体大OBたちが、日本全国の高校の教師（監督）として赴任し、高校ラグビーの発展に貢献した。

一方、大阪の高校ラグビーを代表する荒川・川村・記虎監督は、天理大学出身であり、日体大ラグビー部と距離をおいていたことが、大阪の高校ラグビーがルール改正等に伴うラグビーの転換期（**熱血指導から合理的指導へ**）に適応できた要因の一つになったのではないかと推測される。

③ - 1 ラグビーの主なルール改正

年	回	ルール改正の内容
1965年	44	ラインアウト、スクラム、ラックのオフサイドラインが下げられる。→戦い方一変(バックスの攻撃が効果的に)
1967年	46	ダイレクトタッチは自陣22mライン内側からというローカルルールを採用。→国際ルールに採用
1970年	49	選手交代が認められるようになる。 得点変更(トライ4点、ゴール2点、ペナルティゴール3点)
1981年	61	ゴールライン5m以内のスクラム禁止。
1983年	63	スクラムは最大8人までとされる(前年に目黒高のゴール前10人スクラム) キャプテンシー重視のため、監督はスタンドから見守ることとなる。
1992年	72	トライが4点から5点になる。 キックオフのスピード化。PGからのタッチキックが蹴り出した側のボールに変更。
1993年	73	スクラムを1.5m以上押すことを禁止。 入替可能選手(戦術的交代)が認められる(交代可能の6人中3人まで)
1995年	75	全試合30分ハーフになる(1回戦25分から)。 ラインアウトのサポータープレイングプレーが認められる。→ゴール前PKでタッチに蹴り出し、ラインアウトモールでトライ。
1999年	79	ハーフタイム以外の入替(戦術的交代)が認められる。→選手層の厚さが必要
2000年	80	タックル成立直後でも前方のプレイヤーがボールを取りに行くことが不可。→連続攻撃が増加。(浸透に時間がかかった。)
2003年	83	レフリーが、笛を吹く回数を少なくする方針。→プリベンティブ(反則防止)適用→反則数の減少・インプレー時間の増加。
2009年	89	自陣22m区域内にボールを戻して、タッチキックをしてもダイレクトタッチ扱い。 クイックスローイングは自陣のゴールラインの方向に向かって投げ入れが可能になる。 スクラムのオフサイドラインがスクラムの最後尾の足の位置から5m後方へ。

※ラグビーはルール改正が頻繁に実施されるスポーツであり、ルール改正により戦い方が大きく変更することがしばしば起こりうるスポーツである。特に、ワールドカップ開催(1987年)以降は、「見ていて楽しいラグビー」を志向し、ルール改正がより頻繁に実施されることになった。

③ - 2ルール改正による東北・東京勢の後退と大阪勢の躍進 1

●ルール改正によるラグビーの方向性の変更

①FW中心の力のラグビーからFW・BK一体の展開ラグビー重視へ

- ・キッキングラグビーからトライを獲りに行くラグビーへ

②試合中の中断時間が減少し、インプレイの時間が増加

- ・攻撃側が有利になり、攻撃をミスなく継続できるラグビーへ
- ・自陣では反則せずに粘り強くディフェンスできるラグビーへ

③監督の指示よりキャプテンを中心とした選手の自主性重視へ

- ・型（パターン）のラグビーから選手の判断力、適応力、コミュニケーション能力重視へ

④選手交替枠が拡大されることにより、選手層の厚さがより重要になる。

●レフリーの地域間格差の影響

①2000年のルール改正が、全国的に浸透するのに時間がかかったのではないか。

（全国的な研修・レフリーキャラバンの実施）※「プレーの変化を追って」の報告

②2003年のレフリーの「笛を吹く回数を少なくする」という方針の実施→選手のとまどい。

③ - 3ルール改正による東北・東京勢の後退と大阪勢の躍進 2

大阪勢が躍進した要因

- ①出場校が3校と多い。（上位に進出する可能性が非常に高く有利。）
- ②中学にラグビー部がある学校が多く、ラグビー経験が他県より長い。
↓ … それだけが理由？

頻繁に実施されるルール改正への適応力の高さが要因と推測される。

啓光学園の4連覇（2001～2004年度）はルール改正等による混乱期に達成
東海大仰星高校土井監督…著書『もっとも新しいラグビーの教科書1・2』
選手交替枠の拡大により選手層が厚いチームが圧倒的に有利になった。

コミュニケーション能力の高さ→高校ジャパンのキャプテンに選出される割合の高さ

参考文献

「プレーの変化を追って」（全国高校ラグビー大会プログラム）

『ラグビーをひもとく』李淳駟 2016年 集英社新書

『ものの言いかた西東』小林隆・澤村美幸 2014年 岩波新書

④ - 1 ワールドカップと大阪の高校出身の選手

回	開催年	開催国	監督		主将		選手数	大阪高校出身者	外国出身者	割合(全体)	割合(外国出身除)
第1回	1987	ニュージーランド・オーストラリア	宮地克実	四條暉	林敏之	徳島城北	26	3	2	11.5%	12.5%
第2回	1991	イングランド・スコットランド・ウェールズ・アイルランド・フランス	宿澤広朗	熊谷	平尾誠二	伏見工	26	5	2	19.2%	20.8%
第3回	1995	南アフリカ	小藪修	淀川工	薫田真広	岐阜工	26	7	4	26.9%	31.8%
第4回	1999	ウェールズ・イングランド・フランス・スコットランド・アイルランド	平尾誠二	伏見工	アンドリュー・マコーミック	NZ	30	7	6	23.3%	29.2%
第5回	2003	オーストラリア	向井昭吾	新田	箕内拓郎	八幡	31	5	4	16.1%	18.5%
第6回	2007	フランス・ウェールズ・スコットランド	ジョン・カーワ ン	NZ	箕内拓郎	八幡	33	6	7	18.2%	23.1%
第7回	2011	ニュージーランド・オーストラリア	ジョン・カーワ ン	NZ	菊谷崇	御所工	34	5	10	14.7%	20.8%
第8回	2015	イングランド	エディ・ジョ ンズ	豪州	マイケル・リー チ	札幌山の 手	31	4	9	12.9%	18.2%
第9回	2019	日本	ジェイミー・ ジョセフ	NZ	マイケル・リー チ	札幌山の 手	31	3	16	9.7%	20.0%

外国出身の選手の増加が大阪の高校出身の代表選手の減少に影響しているといえる。

●主な大阪の高校出身の日本代表選手

元木由記雄（W杯に4回選出）・大畑大介（テストマッチのトライ数世界一・世界ラグビーの殿堂入り）・大西将太郎（対カナダ戦の同点ゴール）・堀江翔太（FWで日本人初のスーパーラグビーの選手）

④ - 2 ラグビーワールドカップに対する大阪の反省点

競技場名	所在地	収容人員	主要ゲーム
1 横浜国際総合競技場	神奈川県横浜市	72,327	NZvs南アフリカ アイルランドvsスコットランド イングランドvsフランス 日本vsスコットランド 準決勝1・2 決勝
2 小笠山総合運動公園エコパスタジアム	静岡県袋井市	50,889	日本vsアイルランド
3 東京スタジアム	東京都調布市	49,970	日本vsロシア フランスvsアルゼンチン オーストラリアvsウェールズ イングランドvsアルゼンチン 準々決勝2・4 3位決定戦
- 長居陸上競技場	大阪府大阪市	47,000	
4 豊田スタジアム	愛知県豊田市	45,000	日本vsサモア
5 札幌ドーム	北海道札幌市	41,410	
6 大分スポーツ公園総合競技場	大分県大分市	40,000	準々決勝1・3
7 熊本県民総合運動公園陸上競技場	熊本県熊本市	30,228	
8 神戸市御崎公園球技場	兵庫県神戸市	30,132	
9 熊谷ラグビー場	埼玉県熊谷市	25,600	
10 花園ラグビー場	大阪府東大阪市	24,000	
11 東平尾公園博多の森球技場	福岡県福岡市	21,562	
12 釜石鶴住居復興スタジアム	岩手県釜石市	16,334	

大阪が、日本戦・決勝トーナメント戦・予選リーグのティア1同士の対戦の会場に選ばれた理由

花園ラグビー場の収容人員（W杯の費用は極めて大きく、入場料収入は重要。テレビ放映権料・スポンサー協賛金はWR（旧IRB）の収入、チケット売上がW杯日本大会組織委員会の収入となる。）**が最大の要因。**

大阪市と東大阪市が開催地に立候補し、東大阪市が開催地となった（愛着より冷静で合理的な判断が必要）。

当初予定の新国立競技場（東京）が使用できなくなったことによる絶好のチャンスを、大阪は逃した。